

『隠徳のひじり 玄賓僧都の伝説』

今井 秀和

玄賓僧都^{げんぴん}（七三四―八一八）は、平安時代の南都法相宗興福寺の高僧である。玄賓は河内国に生まれ、南都に出て興福寺の宣教に法相教学を学んだ。その後、伯耆国で隠遁生活を送ったのち、最晩年には備中国に居を移すことになる。桓武天皇の病氣平癒に験力を発揮して大僧都に任じられたものの、これを辞退したことで知られる高徳の僧であった。

すれば、隠れた善行という大掴みの意味は共通する。

二〇一八年は玄賓僧都没後一二〇〇年に当たり、本書はそれを記念して出版されたものだという。書名に含まれる「隠徳」については、著者が冒頭で、仏教用語としての表記である「隠徳」を使用すると明記している。今日における一般的な「いんとく」の表記は「陰徳」であるが、どちらの表記であつても、文化的・宗教的な背景を別に

本書が採用していないほうの「陰徳」の字を目にした場合、評者などはつい、近世の庶民の間に流行した現世利益的な「陰徳」を想起してしまいがちである。その場合の「陰徳」は、人知れず積んだ徳に対する「陽報」を期待する心性が先に立ってしまっている。あくまで本来的な陰徳の思想から派生してきたものではあるのだが、このように「陰徳」の用字は、ときに現世利益的な庶民信仰のイメージを想起させるものでもある。

その点、本書のタイトルとして採用された「隠徳」の表記は、単に仏教用語というだけでなく、高僧としての高い評価を得ながらも「隠者」としての生活を選んだ玄賓

僧都をあらわすのにふさわしいものとして感じられた。本書序章の最初の註でも例示されているように、源信『往生要集』巻下での「隠徳」が、市井において徳を隠したり、山林に通れて知られることを避けた者をあらわすのに使われていることなども、本書における表記の妥当性を示しているように思われる。

さて、現代の日本における一般読者層を想定した場合、「玄賓」を振り仮名なしで読める者は少数派であろう。玄賓とはほぼ同時代を生きた真言宗の開祖である空海（七七四―八三五）や、天台宗の開祖である最澄（七六六―七六七―八二二）などに比べてしまつと、決して知名度が高いとは言えない。しかしながら、かつての玄賓僧都は、三井寺園城寺の道顕や、鴨長明、良寛ら名だたる面々が憧れを抱いていたという、徳の高さで世に知れ渡った紛れもない高僧なのであつた。とくに中世においては玄賓再評価の高まりとともに、様々な説話集や文芸作品に、その名が見られるようになる。

たとえば著者は、鴨長明晩年の編著であ

る『発心集』巻頭の第一話、第二話に玄賓の隱徳説話が配置されていることなどから、鴨長明が出家遁世するに至るきっかけのひとつとして、こうした説話との出会いがあったものと推定している。

説話集としては、玄賓没後三百年ほどを経た平安後期の『江談抄』を皮切りに、『発心集』、『古事談』、『閑居友』、『古今著聞集』、『撰集抄』、『三国伝記』など、伝記では『元亨釈書』、『東国高僧伝』、『南都高僧伝』、『扶桑隱逸伝』、『本朝高僧伝』などに、玄賓の名を見出すことができるという。

そして、こうした説話における玄賓は、時代を越えて繰り返し説話中にあらわれる「登場人物」の一種の宿命として、ときにその実像を越えたストーリー性を帯びるようにもなっていくのである。

他の高僧の多くがそうであるように玄賓もまた、ある程度、歴史的な事実として確認可能な「実像」と、説話や在地伝承を通して生成された「虚像」の間を行き来する存在だった。そして先行研究の多くは、主として歴史的な資料から玄賓の「実像」を

掴むべく営まれてきたものであった。そのため、現代の伝承地で語られている玄賓の「伝説」に目を向けた研究は、ほとんど行われてこなかったのである。

ただし、實在の人物に関する在地の伝承に目を向けた場合には、「虚像」にもそれぞれの土地において語られるべき何かしらの重要な意味があり、ときにはそこに「実像」を照らし出す鏡としての機能が含まれていることもあるだろう。

こうした点に関して、本書の序章である「玄賓僧都伝説の魅力と意味」は次のように述べている。「これらの口頭伝承——引用者注。「伝説」などの民間伝承資料」の背後には何らかの意味が隠されている可能性がある。各地に伝承された玄賓に関する伝説は、実像はともかく、少なくとも伝承地周辺の人々に玄賓がどのようにとらえられてきたかをうかがうことができるものであり、文献資料の間隙を埋めるものとして、玄賓像の一端を語る参考資料となりうるであろう。」(一八頁)

著者がこう言うように、隱遁生活の長かつ

た玄賓について書き残した歴史的な文献資料は決してその数が多くなく、玄賓を巡る情報の全体像に迫るためには、後世語られるに至った伝承の内容や、その地域的な分布に踏み込んだ調査研究が必要なのであった。

こうした研究状況を前進させるべく、著者は網羅的な調査を踏まえて日本各地を巡りつつ、玄賓僧都にまつわる伝説を二十年以上にわたって集めてきたという。各自治体史をはじめとした先行する民俗調査の記録に加え、著者自身による丹念な聞き書きを収録した点でも、玄賓僧都研究に関して他に類を見ない一書であると言えよう。

著者は玄賓にまつわる歴史的に確認可能な事実を礎とした上で、前近代から近現代にかけて語られ、ときに記録されてきた伝承に含まれる要素に着目し、それらが意味するところに迫ろうとする。その際には、伝承の内容それ自体への分析に加えて、伝承がなぜその地域に伝わっているのか、という点を重要視している。そして、あくまでも堅実な姿勢を保ちつつ、伝承が持ち得る

意味を積極的に汲み取ろうとするのである。

そうした意味で本書は玄賓僧都伝説の集大成であり、また、口承文芸・口承文学という研究の視座から、それらの伝説の分析を試みた労作であると言える。そのため、目次だけでもかなりの長さとなるが、日本近世文学を専攻する評者のような門外漢が下手に整理しようとするよりは遙かに本書の全体像が掴みやすいと思われるので、以下に目次を掲出することとした。

序章 玄賓僧都伝説の魅力と意味

I 隠徳のひじり玄賓僧都と法相宗僧侶の社会事業／II 隠遁者のあこがれ／玄賓僧都説話の成立と展開／III 玄賓僧都「伝説」の魅力と意味

備中国(岡山県)編

第一章 備中国における玄賓生誕地伝説と

磨帯寺

はじめに／I 地名「高僧屋敷」と行者様／II 広大山縁起と行基・玄賓伝承／III 磨帯寺と玄賓の母／IV 郡神社と玄賓／結語
第二章 備中国湯川寺における玄賓僧都伝説
はじめに／I 玄賓の来訪／II 玄賓の

呪力／III 帝との交流／IV 玄賓湯川寺を去る／結語

第三章 新見市の玄賓僧都伝説―湯川寺・

大椿寺・四王寺―

はじめに／I 土橋の湯川寺／II 哲多

の大椿寺／III 哲西の四王寺／結語

第四章 「湯川寺縁起」と玄賓僧都伝説

はじめに／I 玄賓の生没年と備中国来

訪年次／II 「湯川寺縁起」と出典の検討

／III 「湯川寺縁起」成立の背景／結語

第五章 玄賓僧都伝説と四王寺の文物

はじめに／I 玄賓伝承と四王寺／II 四

王寺の「当山世代年譜」／III 四王寺の大

般若経／IV 四王寺の文物と末寺／結語

第六章 高梁市中井町の玄賓僧都伝説―定

光寺・光林寺・柴倉神社―

はじめに／I 西方の定光寺／II 柴倉

の光林寺／III 柴倉の柴倉神社／IV 大

草の如意輪観音堂／結語

第七章 備中国における玄賓僧都伝説の諸

相―「哲多郡」の意味するもの―

はじめに／I 高梁の松林寺と深耕寺／II 吉備中央町の袈裟掛岩と僧都川／III 玄賓僧都伝承の広がり／IV 「哲多郡」の意味するもの／結語

第八章 備中国における玄賓終焉地伝説―

大通寺・山野神社

はじめに／I 地名「僧都」と玄賓の墓

／II 大通寺と玄賓庵／III 倉見池と山

野神社／結語

大和国(奈良県)・伯耆国(鳥取県)編

第一章 大和国三輪の玄賓僧都伝説―大神

神社・玄賓庵―

はじめに／I 三輪と玄賓／II 謡曲「三

輪」と大神神社／III 玄賓庵と「玄賓庵

略記」／結語

第二章 伯耆国の玄賓僧都伝説と阿弥陀寺

はじめに／I 阿弥陀寺伯耆大山建立説

／II 『伯耆民謡記』の玄賓伝承／III 「伯

耆志」の玄賓伝承／IV 秦家文書と賀祥

建立説／結語

〔付1〕玄賓僧都伝説関係地図／〔付2〕玄

賓僧都関係年譜／初出論文一覧／あとがき／

索引

ここに掲出した目次を眺めるだけでも、本書が調査研究の対象としている具体的な地域が広範囲にわたることや、口頭伝承・縁起・地誌など様々な資料体が分析の俎上に乗せられていること、そして、伝承の内容と地域性

の双方に重きを置いて篤実に考察を進めていくという企図が把握できるであろう。

一目で分かるように、本書は冒頭に置かれた序章や巻末資料などを除けば、大きく二つのパートで構成されている。大部分は、「備中国（岡山県）編」であり、「大和国（奈良県・伯耆国（鳥取県）編」がそれに続く。

著者が長年にわたる丹念な現地調査の結果として得たのは、玄賓僧都の伝説は備中国、大和国、伯耆国に分布しているということであった。とくに、備中国には非常に多くの伝説があり、実に、生誕地伝説から終焉地伝説までが揃っているという。

備中国の伝承について、著者は次のように整理している。「備中国の玄賓僧都伝説は「生誕地伝承圏」（旧北房町上水田小殿の地名「高僧屋敷」を中心とする地域）、「隠遁地伝承圏」（新見市の湯川寺や旧哲多郡の大椿寺・四王子などを中心とする地域）、「終焉地伝承圏」（八掛町の地名「僧都」を中心とする地域）の三つの伝承圏に大きく分類することができよう。備中国各地の玄賓僧都伝説は、湯川寺伝承圏を核として生誕地

伝承圏や終焉地伝承圏が成立していったと推定される」（二九―二〇頁）

このうち、小田郡矢掛町小林に伝わる終焉地伝説は、これまで存在が知られていなかったものであるという。玄賓終焉の地は諸資料には記されていないために不明というものの、最晩年に備中国に隠遁したことを考え併せたとき、こうした伝承が貴重な意味を持つことを本書は指摘する。

さらに著者は、これら三つの伝承圏が、備中国の三か所の郡家（古代における郡司の政庁）があったと推定される土地と合致していることを示す。これもきわめて重要な指摘である。こうした事実を示すにあたり、著者は玄賓僧都伝説を有する土地の調査はもとより、結果として該当伝承が見当たらなかった土地への調査も精力的に継続してきたという。

岡山県、奈良県、鳥取県に玄賓にまつわる伝説が集中しているということを示す本書の構成は、自ずから、こうした伝承の分布が何を意味しているか、という問題への考察を促すようになっていいる。

著者が玄賓僧都伝説と伝承地との関係に言及した上で、とくに湯川寺周辺の玄賓僧都伝説を指して「高僧伝説伝承事例の教科書ともなりうる豊かなもの」と表現しているように、ものごとの由来を示す起源譚その他、玄賓にまつわる伝承は豊穡な内容を有している。

ただし評者のように、玄賓僧都にまつわる歴史的事象や本書で扱われた地域について明るくない者にとっては、個別の伝説自体の面白さは分かっても、歴史的・地理的条件の中にその伝説を配置した際、どのような座標軸を示すのかという重要なポイントが分かりづらい。その点においては、巻末に付された「玄賓僧都伝説関係地図」および「玄賓僧都関係年譜」が、内容の理解に役立つ非常に有難い付録であった。本書評の冒頭に記した玄賓の生没年は、『僧綱補任』記載の没年と、そこから逆算された生年を記す「玄賓僧都関係年譜」に従ったものである。

さて、これまで述べてきたことから分かるように、本書は玄賓僧都伝説を対象にした、きわめて専門性の高い書籍である。

そのため、逆に言えば、玄賓僧都を知らない読者層の興味を引きにくいという弱点があることは否めない。

ただし、本書は玄賓に関心を持たない者にも、多くの有益な視点や具体的な情報をもたらしてくれる。また、これは基本的かつ重要な点なのであるが、玄賓僧都伝説そのものが、実に面白いのである。たとえば湯川寺周辺における次のような伝説においても、登場する僧侶の名が玄賓として伝えられているのは興味深い。

玄賓が川に入ったとき、足に二ナ（巻貝）の尻が刺さった。怒った玄賓によって、それ以降、その川に棲む二ナの尻は全て丸くされたという（「尻無川の由来」）。

獵師が雉を捕って食べているところに玄賓が通りかかった。玄賓が獵師から雉の肉片を貰って揉むと、肉片が雉になった（「玄賓僧都」）。

このように、本書に収録された個別の伝説を眺めるだけでも面白いのであるが、ときに玄賓の伝承が、少なからずそれ以外の伝承との共通点を持つ、きわめて普遍的な

ものであることにも気づかされる。伝説に興味を持つ読者が本書の各所を開けば、このことはすぐに諒解されるはずである。

さらに本書は、伝説の変遷について考える上でも重要な視座を与えてくれる。たとえば、備中国の齋帯寺には行基開基伝承をはじめとする行基の伝説があり、また、玄賓にまつわる伝説もあるという。両者はともに法相宗の高僧であるが、近年の研究によれば、行基は近畿地方を出ることなく生涯を終えたのだという。こうした点から著者は、「岡山県に行基伝承を持つ寺が非常に多い原因の一つとして、平安時代初期に「法相宗」の玄賓が来訪した事実が深く関与している」「ことを推定している（四五頁）。

また、次のような指摘も興味深いものであった。備中国の伝承において「矢掛の倉見池」（玄賓が池）築造者の名前が、時代の推移に伴って南都法相宗の「玄賓僧都」とも、真言宗の開祖である「弘法大師」とも、そしてさらには前近代の文芸において阿倍晴明のライバルとして有名であった播磨国の陰陽師「蘆屋道満」とも言われるというのである。

さらに、近年における特定の地域（宇角地区）では、倉見池築造伝承は残りつつも、これら固有の人物名自体が忘れられてしまいうに至ったという（二二頁、二〇八頁等）。

この、「玄賓が池」の持つ問題ひとつとってみても、穿井伝承が著名な特定の人物と関わっていることの意味について考えようとする者にとっては、大変に示唆に富んだ内容である。備中国の玄賓倉見池築造伝承は文献には記録されず、在地の口頭伝承が残されるだけだという。こうした点からも、本書の提示した調査内容はきわめて重要である。

ほかにも本書には、「伝説」をはじめとした口頭伝承に関心のある読者それぞれの興味に沿った、多様な発見が含まれているはずである。今後の玄賓研究にとつての必読書であることは当然のことながら、これまで玄賓に関心を持っていなかった、あるいは玄賓の存在を知らなかった層にこそ読んで貰いたい、新たな発見の可能性に満ちた一冊である。

二〇一八年六月 法蔵館刊

本体二六〇〇円

（いまい・ひでかず／蓮花寺佛教研究所）